

## 養護教諭学生の看護実習における目標達成のためのプロセス

大須賀 恵子\*<sup>1)</sup> 舘 英津子\*<sup>2)</sup> 大澤 功\*<sup>1)</sup> 佐藤 祐造\*<sup>1)</sup>

**目的：**本研究は、看護実習における実習目標達成のためのプロセスを検証した。

**方法：**養護教諭志望の2006年度3年次学生28名と2007年度3年次学生17名を対象として、

1. 2006年度学生と2007年度学生の実習終了後の自己評価表平均得点の項目別比較
2. 2007年度学生の課題レポート「臨床実習で学んだこと」(4000字程度)から、「養護教諭になったとき活用できると思う(考える)」および「誕生と死についてのエピソード」が書かれた部分を抽出し、実習目標、登場人物との関連性を検討した。

**結果：**2007年度には、前年度の実習評価に基づいた課題を設定し、教育内容の充実と教育方法の工夫を行ったところ、ほぼ全ての自己評価項目の平均得点が上昇していた。課題レポートの中から実習目標に関わるエピソードに登場する人物との関連性を検討したところ、学生たちは、看護師を初めとする医療スタッフからは勿論だが、患者・家族から多くのことを学んでいることがわかった。

**結論：**実習の成果を上げるためには、医療スタッフからは勿論だが、学生が患者・家族から効果的に学び取ることができるような教育的工夫や配慮を行うことが重要であると考えられる。教育的工夫や配慮には、以下のような内容が考えられる。

1. 学生に教育目的・目標を十分理解させる。
2. 大学での講義・演習と実習とを連動させることによって、理論と実践とを結合させた総合学習計画を作成する。
3. 学生に多くの内容を学ばせようとするのではなく、ポイントを押さえ、しかも目標が達成できるように工夫された的確な教材や指導方法を考案することが必要である。
4. 実習評価を実施し、問題点を明確にして、改善していくための計画を立案し次年度に結び付けていく。

**キーワード：**training for school nurse teacher, nursing practice, nursing practice objects

### 1. 緒言

看護実習は、養護教諭を志望する学生たちが初めて経験する実習である。本学では7月下旬から8月中旬にかけての3週間という集中実習のため、学生たちは当初緊張や不安をもって実習に臨んでいる。しかし、実習に入ると、実習指導者である看護師や医療スタッフの指導のもとで患者・家族に出会い、確かな学習体験をする。そして実習終了時には、どの学生も自信が

できるのか、一段と大人びて成長した姿を見ることが出来る。学生の成長は教員にとって喜びであり、確かな手応えとやりがいを感じることが出来る。

看護実習は養護教諭の専門性の向上を図ることを目指しており、実習で得た知識や技術が将来学校における保健管理、保健指導に結びつき、適切な判断と実践力を養えることが期待されている<sup>1)</sup>。したがって養護教諭養成機関のほとんどが必須科目に位置づけているが、養成機関によって多様な実習施設・形態で実施さ

\* 1) 愛知学院大学心身科学部健康科学科

\* 2) 愛知学院大学心身科学部健康科学科非常勤講師

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: osuka@dpc.agu.ac.jp

れているのが現状である。

本学においても実習内容を充実するために、実習施設との連携の強化や教育方法の検討等の工夫を行ってきた<sup>2)</sup>。しかし、2006年度実習学生（本学科1期生）の自己評価平均得点は、「予防的見地からの患者支援」など、教員が将来養護教諭になる学生にとって重要性が高いと考えている項目が低かった。そこで、2007年度には、前年度の実習評価を反映させ、実習前に「死を学ぶ」機会を設けることや、予防的支援、家族単位の支援、看護技術を介しての患者との関わり、患者の安全・安楽・自立を考えた支援についての教育内容の充実と教育方法の工夫を行った。

本研究は、その成果を確認したうえで、実習目標達成のためのプロセスを検証することを目的とした。

## II. 方法および倫理的配慮

対象：養護教諭志望の2006年度3年次学生28名（全員女子、平均年齢 $20.5 \pm 0.6$  [標準偏差] 歳）と2007年度3年次学生17名（女子16名、男子1名、平均年齢 $20.4 \pm 0.9$  [標準偏差] 歳）

方法：

1. 2006年度学生と2007年度学生の実習終了後に提出させた自己評価表平均得点の項目別比較

評価基準は、「目標が十分達成できた」5点、「目標が達成できた」4点、「目標がほぼ達成できた」3点、「達成できなかった」0点とした。

2. 2007年度学生の課題レポート「臨床実習で学んだこと」（4000字程度）から、「養護教諭になったとき活用できると思う（考える）」および「誕生と死についてのエピソード」が書かれた部分を抽出し、実習目標、登場人物との関連性を検討した。

倫理的配慮：対象とする学生に本研究の趣旨を口頭で説明し、個人を特定しない形で公表することに対して文書による同意を得た後、本学部「ヒトを対象とする研究審査会」による承認を得た。

## III. 本学科看護実習の概要

目的・目標：保健医療施設における病院機能や医療従事者について理解するとともに、患者とのコミュニケーションを通して患者のニーズや患者を取りまく生活・療養環境を理解し、養護教諭に必要な基本的な看護の知識・技術を習得する。目標に対応させた評価項目は表1の項目欄に示した。

1. 実習単位数：6単位
2. 実習病院：病床数364床の総合病院（急性期病院）
3. 実習時期と形態：7月下旬～8月中旬、集中実習
4. 実習対象学生：養護教諭志望の3年次学生
5. 実習指導者は看護師であるが、教員も全実習期間を通して指導に当たる  
実習日程：事前指導 2日間  
病院での臨床実習 10日間  
中間帰校日（グループワーク）1日  
事後指導と実習のまとめ 2日間
6. 実習内容：実習外来（※内科・\*救急外来、小児科、口腔外科、眼科、産科、病院の案内）  
※2006年度のみ実施 \*2007年度のみ実施  
実習病棟（循環器センター病棟、整形外科脊椎・脊髄センター、外科・脳神経外科、内科と皮膚科の混合病棟、療養病棟、呼吸器内科・泌尿器科・眼科・歯科口腔外科4科を主体とした混合病棟、小児科・内科病棟）
7. 病棟実習では受け持ち患者制
8. その他（オリエンテーション、産科病棟での新生児の観察・世話体験、妊婦体験、分娩台体験、母親の授乳見学体験、母親教室、栄養相談の見学、医療福祉相談についての講義、反省会など）

## IV. 結果

### 1. 2006年度と2007年度の自己評価表平均得点の項目別比較

2006年度実習学生の自己評価平均得点は、「予防的見地からの患者支援」「家族を単位とした支援」「患者と知識・技術を介しての良好な関わり」「患者の安全・安楽・自立を考えた支援」など、教員が将来養護教諭になる学生にとって重要性が高いと考えている項目が低かった。そこで、2007年度には、前年度の実習評価に基づいた課題を設定し、教育内容の充実と教育方法の工夫を行ったところ、ほぼ全ての自己評価項目の平均得点が増加した（表1）。特に「医療チームメンバーの役割・協力体制」、「患者の生活背景を知る」「患者の健康問題を考える」「患者の安全・安楽・自立を考えた支援」「学生が実施した援助について客観的な評価」「予防的見地からの患者支援」「学内カンファレンスに積極的に参加」が有意に高くなっていた。

表1 臨床実習における学生自己評価の年度比較

評価項目	平均点		t検定結果
	2006 (n=28)	2007 (n=17)	
1. 病院の機能・役割を考えることができたか	4.3	4.4	.676
2. 医療チームメンバーの役割・協力体制が理解できたか	3.9	4.5	.002**
3. 患者の受診行動への配慮などを知ることができたか	3.7	4.2	.069†
4. 患者の治療状況や生活背景を知ることができたか	3.7	4.5	.008**
5. 患者の健康問題を考えることができたか	3.8	4.5	.004**
6. 患者の安全・安楽・自立を考えた支援ができたか	3.6	4.3	.019*
7. 患者の反応を観察することができたか	4.4	4.8	.061†
8. 学生が実施した援助について客観的な評価ができたか	3.8	4.6	.000***
9. 患者のプライバシーを守ることができたか	4.6	4.8	.239
10. 患者の人格を尊重して接することができたか	4.5	4.8	.124
11. 患者の話を注意深く聴取することができたか	4.4	4.8	.052†
12. 患者と知識・技術を介しての良好な関わりができたか	3.5	4.1	.122
13. 家族を単位とした支援について考えることができたか	3.3	3.7	.455
14. 予防的見地からの患者支援について学習ができたか	2.9	3.7	.047*
15. 誕生と死から命の尊さを学ぶことができたか	-	4.9	-
16. グループメンバーと協力して実習ができたか	4.8	4.7	.808
17. 積極的な実習ができたか	4.3	4.4	.626
18. 適切な言葉遣いと礼儀正しい態度で実習ができたか	4.7	4.8	.465
19. 適切な記録が書け、期限内に提出できたか	4.1	4.5	.071†
20. 施設内カンファレンスに積極的に参加できたか	4.0	4.6	.064†
21. 学内カンファレンスに積極的に参加できたか	4.4	4.8	.011*

† p < 0.10; \*p < 0.05; \*\*p < 0.01; \*\*\*p < 0.001

表2 将来養護教諭になったとき「活用できる」と書かれた内容（複数抽出） n=17

項目	合計	エピソードに登場する人物		
		病院で働く 複数の職種	看護師	患者 家族
患者・家族支援のあり方	17	4	5	8
医療チームの役割・協力体制	12	10	2	0
誕生と死から命の尊さを学ぶ	7	0	1	6
予防的見地からの患者支援	6	1	0	5
専門職業人としての姿勢	4	0	4	0

※2007年度対象学生の課題レポートからの分析内容である。

## 2. 将来養護教諭になったとき「活用できる」と書かれた内容

表2は、2007年度対象学生の課題レポートの中から「養護教諭になったとき活用できると思う（考える）」「誕生と死についてのエピソード」が書かれた部分（具体的内容）と実習目標に関わるエピソードに登場する人物との関連性を検討した結果である。

これを見ると、最も多かった項目は「患者・家族支援のあり方」で17件が活用できると記載していた。次が「医療チームメンバーの役割・協力体制」12件であった。エピソードに登場する人物を見ると、「医療チームメンバーの役割・協力体制」「専門職業人としての姿勢」では、その全てが看護師を始めとする病院の医療スタッフであった。ところが、「患者支援のあ

り方」「誕生と死から命の尊さを学ぶ」「予防的見地からの患者支援」については、登場人物が患者・家族である割合が増加しており、順に47.1%, 85.7%, 83.3%であった。つまり、これらの項目については、患者・家族から多くのことを学んでいることがわかる。

### 3. 学生の記述内容の具体例

#### 1) 医療チームメンバーの役割・協力体制 (記述例)

- ・病院には様々な病棟があり、医師や看護師を始め、検査技師、社会福祉相談員など様々な職種が働いていて、その全てが患者の健康を保持増進させるために機能している。患者の健康を守るためには、様々な要因を考慮し、退院後も健康が維持できるように配慮する必要があるからである。各職種が個別に機能しているだけでは、患者の健康を守ることはできない。学校現場でも、養護教諭だけでは児童・生徒を守ることができない。校長、教頭、担任、事務員や用務員などの職員に加え、学校医、学校薬剤師、保護者などの協力があるこそ、安全・健康の管理や精神的なケアを行うことができる。
- ・問題を一人で抱え込むのではなく、情報を共有しながら支援を行う。家族との連携も不可欠であり、患者のケアと同時に家族のケアも大切である。入院前の心理的・社会的な背景や入院中の治療方針、退院後の先を見据えての支援まで、広い視野で判断したうえでの対応が求められる。看護師は、患者と家族、医師、医療ソーシャルワーカーなどの調整役として機能していた。

#### 2) 専門職業人としての姿勢 (記述例)

- ・看護師が患者と話すときの基本姿勢は、患者と同じ目線になるようにしゃがみ、笑顔で手や肩などに手を添え、軽くタッチして話していた。

#### 3) 患者支援のあり方 (記述例)

- ・患児を見ていると、一番の薬や元気の源は友達だと思った。疲れたと言いつつも友達と楽しそうにはしゃいでいるときが一番の笑顔を見せていた。養護教諭があれこれ考えて力み過ぎないで、子どもの様子を観察し、子どもが必要としているときに支援をしていくという姿勢が大切だと感じた。
- ・新生児の授乳を見学していて、赤ちゃんのときは、尿や便、ゲップなど何が出来ても褒められている。子どもが成長していても「褒める」ということを忘れずに育てていけば、健やかに育つのではないかと思った。
- ・患者はそれぞれ症状が異なっていて、それに対応し

たケアが必要になる。教科書的には正常値でなかったとしても、その患者にとって現在はベストの状態であるということ、またその逆の場合も毎日注意深く観察していなければ気付くことはできない。その人にとっての正常値を知ることが、その人をケアすることであると思う。養護教諭になったとき、保健室に来たその子どもの訴えが、自分にとってはその日の5人目の「お腹が痛い」という訴えだったにしても、その子にとっては今最も訴えたい苦痛であり、解決して欲しいことである。相手の立場に立って、その子の苦しみを考えることの重要性を学んだ。

「誕生から命の尊さを学ぶ」については、昨年度の本学科紀要<sup>2)</sup>に、産科病棟実習を通しての感想としてまとめたので、本稿では割愛し、「死から命の尊さを学ぶ」についての学生の記述例を紹介したい。

#### 4) 死から命の尊さを学ぶ (記述例)

- ・受け持ち患者Aさんは、優しい穏やかな方であった。お話しをしているうちに、実習に対する緊張も和らいでいった。Aさんは、「学生さんは夢や希望があって良いですね。私はもう死ぬだけだから…」と言った。私は、治療を必死に頑張っているAさんに「頑張ってください」とは言えなかった。一緒に過ごさせていただく時間の中で、少しでもAさんに楽しみを見出してもらいたかった。そのためにも、患者さんが求めているものは何なのか、実習という限られた時間のなかで自分に何ができるのかを考えた。人を楽しませるためには、まず自分が楽しむことが必要である。笑顔を忘れずに、ありのままの自分で接するようにと心掛けた。笑っているとき、それはたとえ一瞬でも苦痛を忘れることができる。私の中でAさんの笑顔がみたいという想いが強まった。しかし、実際にできることはあまりにも少なかった。私はAさんから命の尊さを教えていただいた。五体満足で生きていることが、素晴らしいことであると気付かせてくださった。これからは、感謝の気持ちを大切に、精一杯生きたい。入院中における生活の質、QOLを高めることの重要性と難しさを知った。今まで生と死は、相反するもののように思っていたが、生と死の繋がりを感じた。
- ・私が清拭をさせてもらった患者さんが実習中に亡くなられた。何日か前までは明るく笑っていたのに、正直ショックだった。死というものを身近に感じ、病院は生と死が隣合わせである場所だと気付かされた。

## 5) 予防的見地からの患者支援 (記述例)

- ・受け持ち患者は、慢性閉塞性肺疾患のため呼吸不全で酸素吸入をしていた。入院前は喫煙をし、運動習慣がなく、栄養についての意識が低く、食事時間も決まっていなかった。身体の調子が悪くても受診せず売薬で済ませていたと話してくれた。病院内には様々な病棟があり、医師や看護師始め、検査技師、社会福祉相談員など様々な職種が働いていて、その全てが患者の健康を保持増進させるために機能している。患者の健康を守るためには、様々な要因を考慮し、退院後も健康が維持できるように受け持ち患者の治療状況や生活背景から、一次予防、二次予防、三次予防について考えた時に、健康教育の必要性を強く感じた。
- ・患者に予防的な考えがなく、健康的な日常生活を過ごしてこなかったために病気で苦しんでいた。また、早期発見・早期治療という考えがあれば、症状が出たらすぐに受診できたと思われる。受け持ち患者自身入院してからそのことに気づき、早期発見・早期治療の大切さを感じたと話していた。養護教諭は、生活習慣が作られる時期である年齢に、保健の授業や保健日より、個別指導を通して、子どもたちが健康的な生活習慣がつかれるように、健康的な行動選択ができるように支援していかなければならないと考えた。

実習病院であるN病院は、脊椎側彎症の専門医がおり治療技術が進んでいることで有名な病院である。実習期間中(夏休み期間中)は、全国から患者が治療のために入院してくる。脊椎側彎症は女性に多く、手術は初経後に行われることが多いため、学生たちは小学校高学年から中学生の患者と出会い、受け持ち患者を通して様々なことを学ばせていただく。以下に脊椎側彎症の患者を受け持った学生の記述内容をあげる。

## 6) 脊椎側彎症の患者から学んだこと (記述例)

- ・脊椎側彎症の受け持ち患者を通して、養護教諭としての患者への支援について以下の内容を考えることができた。①健康診断などを通して早期発見に努める。②発見後家族が適切に対処できるように支援する。③退院後学校生活に戻った時に積極的に関わり、患児を支援していく。④コルセットを着用しての生活になるので、周囲の視線や姿勢へのコンプレックス、手術の傷跡など様々な不安や心配を抱えることになる。いじめにも気を付けなければならない。⑤体力が落ち、疲れ易くなっていることに配慮した対

応が必要。⑦その子に対して特別な扱いをするというわけではないが、学校全体として配慮していくことが必要であり、その鍵を握るのが養護教諭である。⑧患者だけでなく家族への精神面でのサポートも欠かせない。⑨育成医療制度についても知っていなければならない。これらのことは、側彎症だけでなく、不自由に感じる病気をもっている全ての児童生徒にも言えることである。

## V. 考 察

### 1. 実施年度比較による看護実習の成果

2006年度と2007年度自己評価平均得点の項目別比較では、ほぼ全ての自己評価項目の平均得点が上昇し、総合平均得点は2006年度4.0、2007年度4.4であった。特に重要度が高いにもかかわらず昨年度平均得点が低かった「患者の安全・安楽・自立を考えた支援」「予防的見地からの患者支援」が有意に高くなっていたのは、成果と考えても良いのではないだろうか。しかし、平均得点が上昇したといっても、「家族を単位とした支援」「予防的見地からの患者支援」は共に3.7であり、他項目は全て4.0以上であるのに比べて低い。今後さらなる教育内容の充実と教育方法の工夫が必要である。

### 2. 実習目標達成のためのプロセス

本研究では、実習目標達成のためのプロセスを、学生の課題レポート「臨床実習で学んだこと」から、「養護教諭になったとき活用できると思う(考える)」および「誕生と死についてのエピソード」が書かれた部分を抽出し、実習目標、登場人物との関連性を検討する方法によって検証した。その理由は、昨年度のまとめ<sup>2)</sup>を実施した結果、「看護実習での学習内容を養護教諭としてどう活かすかについて、常に学生に考えさせるように支援する」ことが、実習目標を達成していくためには重要であると気づいたからである。したがって、2007年度は、病院で実習した内容を養護教諭としてどう活かすかに重点をおいた実習指導をしてきた。このことから、課題レポートのその記述部分を抽出・分析することによって、目標達成のためのプロセスが見えてくるのではないかと考えたのである。

実際に、本研究で得られた結果から、目標達成のためのいくつかのプロセスが見えてきたように思われる。

一つ目は、医療チームメンバーの役割・協力体制や患者・家族支援のありかたの記述例などから、実習の直接の指導者は看護師だが、実際には医師、歯科医師、

薬剤師, 栄養士, 言語聴覚士, 検査技師, 社会福祉相談員など, 病院で働いている実に多くの職種から様々なことを学習していることが分かる.

二つ目は, 学生たちは, 看護師を初めとする医療スタッフからは勿論だが, 患者・家族から多くを学習している. 患者・家族から学び取った内容には, 昨年度自己評価平均得点が低かった「患者・家族支援のあり方」「予防的見地からの患者支援」などが含まれている. 実際, 学生たちが書いた課題レポートを読んでいると, 受け持ち患者さんたちは, 若い学生たちに意図的にメッセージを発しているのではないかと思う程度である. そして学生たちはそれを確実に受け取っていると感じる. このことから, 実習成果を上げるためには, 医療スタッフからは勿論だが, 学生が患者・家族から効果的に学び取ることができるような教育的工夫や配慮を行うことが重要であると考えられる.

三つめは, 学生の記述内容の具体例の最後の, 「脊椎側彎症の患者から学んだこと」などで示したように, 学生たちは病院で学習した内容を, “健康”をキーワードに, 学校という場で仕事をする養護教諭の仕事に当てはめ, 学習できていることがわかる. 実習指導者の支援を受けながら, 患者・家族にじっくりと向き合い, 共に悩み考えることで, 実習目標全体が達成されている.

四つめは, 学生たちは命の尊さを確実に学んでいることである. 2007年度の「誕生と死から命の尊さを学ぶことができたか」の評価項目に対する学生たちの自己評価平均得点は, 全21項目のなかで最も高く4.9である (2006年度はこの項目がなかった).

私たちは, これから養護教諭として活動する学生たちにとって, 命の尊さを学ぶことは, とても重要であると考えている. 「死から命の尊さを学ぶ」の記述例にあげた学生の一人は, 「これからは, 感謝の気持ちを大切に精一杯生きたい」と書いているが, 教育の成果を考えると, 学生が真にこのような気持ちで養護教諭を目指すようになることこそ最大目標であろう.

## VI. 結 論

看護実習の成果をあげるためには, 教育的工夫や配慮が必要であると述べたが, どのようなことを実践していけばよいのだろうか. 私たちは, 具体的には以下のような内容が必要だと考えている.

- 1) 学生に教育目的・目標を十分理解させる.
- 2) 大学での講義・演習と実習とを連動させることによって, 理論と実践とを結合させた総合学習計画を作成する.
- 3) 学生に多くの内容を学ばせようとするのではなく, ポイントを押さえ, しかも目標が達成できるように工夫された的確な教材や指導方法を考案することが必要である.
- 4) 実習評価を実施し, 問題点を明確にして, 改善していくための計画を立案し次年度に結び付けていく.

## 謝 辞

看護実習において, 名城病院早川哲夫院長を始めとする病院スタッフの皆様から懇切丁寧なご指導をいただきましたことを, 心からお礼申し上げます. また, 入院中の患者様やご家族の方々に人方ならぬお世話になりましたことを厚くお礼申し上げます.

## 引用文献

- 1) 本田優子, 岡田加奈子, 天野敦子ほか: 教育学部養護教諭養成の臨床実習に対する卒業生の学習ニーズ, 学校保健研究, 45 (2), 102-120, 2003.
- 2) 大須賀恵子, 梶岡多恵子, 大澤功, 水戸菜穂子, 佐橋昇子, 野村裕子, 佐藤祐造: 養護教諭を目指す学生の看護実習の有用性, 愛知学院大学論叢心身科学部紀要, 第3号, 7-13, 2008.

最終版平成20年9月10日受理

## Goal Achievement Process during Nursing Practice for Students of the School Nursing Course

Keiko OHSUKA, Etsuko TACHI, Isao OHSAWA, Yuzo SATO

### Abstract

**Objective:** The present study was performed to examine the goal achievement process during nursing practice.

**Methods:** Subjects were 45 third-year students (28 of the school year 2006 and 17 of the school year 2007) who aspired to be school nurses. Data was collected by 1) analyzing comparatively the average scores of the items that composed the post-practice self-evaluation forms and 2) extracting parts of the texts related to “things that can be applied when I become a school nurse” and “episodes related to birth and death” from the assignment reports entitled “things I learned in the clinical practice” (~4,000 characters) written by students of the school year 2007 and examining qualitatively their relation with the goals of the nursing practice and people described in the reports.

**Results:** Analysis of the relation between students and people described in their assignment reports during episodes concerning the goals of the practice revealed that students learned much from not only nurses or other medical staff but also from the patients and their families.

**Conclusion:** From the results of the present study it can be inferred that, in order to improve the nursing practice outcome, it is essential to devise and implement educational means which effectively facilitate learning from not only the medical staff but also from patients and their families. Ideas for improving educational content fulfillment and educational methodology devising are as follow:

- 1) Improve the comprehension of the students with regard to the educational goals.
- 2) Prepare an integrated learning plan that combines theory and practice by connecting the contents of the lectures/seminars at the university and the nursing practice.
- 3) Be conscious of the necessity of avoiding rote or quantitative learning and develop precise teaching materials and guidance methods that indubitably lead to the attainment of the objectives related to essential points.
- 4) Design an improvement plan for the next school year which is based on the problems identified in the nursing practice evaluation.

Keywords: training for school nurses, nursing practice, nursing practice objectives

